

5. 東南アジアにおけるモデル利用の模索

東南アジア各国で数値モデルを利用した研究や気象予測が始まりつつある。それはまさに模索の段階にあるが、その時期に KAGI21 の枠組みでこのワークショップが開かれたことは、参加した各国の研究者にとっても我々にとってもたいへん意義深いものであった。モデル利用に向けた積極的な姿勢はどの国にも共通していた。このワークショップによって東南アジアの参加国と日本との間にモデル利用についての一本の道が開かれたような印象を受けた。それはこれまでこのような本格的なモデルのワークショップによるアジアの国々の情報交換がほとんど行われてこなかったからである。東南アジアにおけるモデル利用には、京都大学の教育的貢献と KAGI21 の貢献をのぞくと、残念ながら日本からの貢献がほとんどない。利用されるモデルはすべてが米国の MM5/WRF や欧州のモデルである。長期再解析として ERA40 を利用するが、JRA25 は知られていなかった。我が国には気象庁気象研究所の斉藤さんと瀬古さんが報告されたように洗練された非静力学モデルとデータ同化法がある。台風という大きな問題を共有し、豪雨の量的予測が急務であるようなアジアの国々にとって、それらの日本の技術を利用できないのは甚大な損失である。一方でそれは日本にとっても国際貢献という面から同じだけの大きな損失をしているといえる。モデル利用の模索が始まった今こそ、日本は東南アジア各国にその面でも貢献をするときである。このワークショップはその出発点となりうるもので、ここで開かれた道をより太いものにしていかなければならない。そのためにはモデルやデータの提供をはじめとして、それらの利用法の技術指導など具体的な行動が必要で、またそれを可能にする枠組みをつくることが不可欠である。KAGI21 で始められたこのような内容のある情報交換を継続していくことも重要である。そのことを強く認識させられたこのワークショップは、私自身にとっても非常に意義あるもので、これに招待していただいたことを深く感謝いたします。

(坪木和久)